

資料1 Empress Elizabeth

資料1-①

エリーザベト・フォン・エスターライヒ（独: Elisabeth von Österreich、1837年12月24日 - 1898年9月10日）は、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇帝（兼ハンガリー国王）フランツ・ヨーゼフ1世の皇后。出生名は、エリーザベト・アマーリエ・オイゲーニエ・フォン・ヴィッテルスバッハ、ヘルツォーギン・イン・バイエルン（独: Elisabeth Amalie Eugenie von Wittelsbach, Herzogin in Bayern）。「シシィ」（Sissi, Sissy, Sisi）の愛称で知られる。

ドイツ語表記ではエリーザベトが正しいが、日本ではエリザベートとも表記されている。

生涯

バイエルン王家であるヴィッテルスバッハ家傍系のバイエルン公マクシミリアンとバイエルン王女ルドヴィカの次女として生まれた。幼少の頃は父マクシミリアンと共に街に出かけ、チター奏者に扮した父の傍らでチップを貰う少女に扮したり（もちろん住民は、王家に連なる極めて身分の高い公爵と公女であると知りつつも知らぬそぶりで歓迎し、エリザベートは後年、「私が唯一自ら稼いだお金」と言ってそのチップを大切に保管していた）、また狩りに行くなどしていた。王位継承権からは遠く公務とは無縁であったため自由を満喫していた。

そんな生活は1853年8月、姉ヘレーネの見合い相手だった母方の従兄である皇帝フランツ・ヨーゼフ1世に見初められて求婚されたことによって終わりを告げた。シシィは婚約が決まった翌日からお妃教育を受けさせられたが、不真面目で勉強嫌いの彼女は何度もヒステリーを起こしていたという。しかし、彼女にとって生涯忘れられない出会いもあった。お妃教育の一環として彼女に広大なオーストリア帝国の歴史を教えたのは父マクシミリアンが雇ったハンガリー人貴族ヤノス・マジュラート（ハンガリー語版）伯爵であった。伯爵は彼女が最初に出会ったマジヤル人だった。また、伯爵は共和制の素晴らしさを彼女に密かに吹き込むなど、彼女に多大な影響を与えた。1854年4月、シシィは16歳で結婚、オーストリア皇后となった。

しかし、自由人だった父の気質を多く受け継いだ彼女は、母方の伯母で姑であるゾフィー大公妃がとりしきる宮廷の厳格さに耐えられず、また、マイラット伯爵の教育を受けたエリーザベトがハンガリーや当時独立を求めている北イタリアに同情的であることを察したゾフィーは、エリーザベトの影響でフランツ・ヨーゼフ1世がハンガリーやイタリアに寛容になることを嫌い、中傷ビラを撒く、エリーザベトが宮殿の外に出た際には暴徒に囲ませる、といった嫌がらせをした^[1]。徐々にエリーザベトは人前に出ることを極度に嫌がり宮廷生活や皇后としての義務や職務を嫌い、大西洋に浮かぶマデイラ諸島などに療養に行く、夫に同行してイタリアを訪問する、あるいは個人的に旅行に出かけたり病院を慰問したりと、生涯に亘りさまざまな口実を見つけてはウィーンから逃避し続けた。

特にエリーザベトが心安らぐ最高の場所としたのは、当時オーストリア帝国の一部であったハンガリーであった。ゾフィー大公妃がマジダル人嫌いだったこともあり、エリーザベトは死ぬまでハンガリーを熱愛し続けた。その熱意は勉強嫌いの彼女が、短期間でハンガリー語を身につけ、皇帝とハンガリー貴族の通訳を出来るほどであった。穏健独立派のハンガリー貴族ジュラ・アンドラーシ伯爵と知り合い、1866年の普墺戦争敗北を受けて、翌1867年にハンガリーの自治権を認めたアウスグライヒ（妥協）を締結するにあたっては陰の推進者の役割を果たした。アンドラーシはアウスグライヒ後のハンガリー王国の初代首相、帝国外相となる。

エリーザベトの晩年最大の悲劇は、息子ルドルフ皇太子の自殺であった（1889年、暗殺説もあったが、のちにルドルフの心中相手が自分の母宛に送った遺書が発見された）。夫フランツ1世の死後喪服を着続けた MARIA・テレジアに倣い、その後彼女は死ぬまで喪服を脱ぐことはなかった。

1898年9月、旅行中のジュネーヴ・レマン湖のほとりで、イタリア人の無政府主義者ルイジ・ルケーニに鋭く研ぎ澄まされた短剣のようなヤスリで心臓を刺されて殺害され、その生涯を閉じた。



ハンガリー王妃戴冠時のエリーザベト（1867年）



ヴィンターハルターによるエリーザベト皇后（1865年）

資料1-②

フランツ・ヨーゼフ1世（ドイツ語: Franz Joseph I.^[註釈 1]、1830年8月18日 - 1916年11月21日）は、オーストリア皇帝（在位：1848年 - 1916年^[1]）。ハンガリー国王などを兼ねた。

全名はフランツ・ヨーゼフ・カール・フォン・ハプスブルク＝ロートリングゲン（ドイツ語: Franz Joseph Karl von Habsburg-Lothringen）。ハンガリー国王としてはフェレンツ・ヨージェフ1世（ハンガリー語: I. Ferenc József）、オーストリア帝国内のベーメン国王としてはフランティシェク・ヨゼフ1世（チェコ語: František Josef I.）である。

68年に及ぶ長い在位と、国民からの絶大な敬愛から、オーストリア帝国（オーストリア＝ハンガリー帝国）の「国父」とも称された。晩年は「不死鳥」とも呼ばれ、オーストリアの象徴的存在でもあった。皇后は美貌で知られるエリーザベトである。後継者となった最後の皇帝カール1世は統治期間が2年に満たなかったため、しばしばオーストリア帝国の実質的な「最後の」皇帝と呼ばれる。

ウィーン市長ルエーガーとの対立

即位当初のフランツ・ヨーゼフはユダヤ人の解放を拒んでいたが、1867年以降はユダヤ人の臣民としての身分を尊重するようになった。反ユダヤ主義の社会的風潮の中で、大きな資本を握るユダヤ人の権利の庇護者となったのである^[88]。1914年にユダヤ人難民をウィーンから放逐するとキリスト教社会党が政府を脅したのに対し、フランツ・ヨーゼフは追われたユダヤ人にシェーンブルン宮殿を開放するという脅しでこれに応じたと伝えられる^[88]。

1895年、ウィーン市長選挙でキリスト教社会党のカール・ルエーガーは、ユダヤ人を激しく攻撃する演説をおこなって人気を獲得し、市議会での投票で過半数を得た。しかしフランツ・ヨーゼフはこれを承認せず、「余の目の黒いうちは、わが帝都の市長として彼を批准することはなからう」と拒否し続けた^[89]。当時、市長は皇帝の任命する州の総督に承認されなければならなかった。そのため皇帝の同意を得られないルエーガーを総督は承認せず、ルエーガーは正式な市長になれなかったが、しかしいくら皇帝が拒否しても彼は繰り返し市長に選出された^[89]。この確執は3年にもわたって続き、皇帝による市民無視との印象をウィーン市民に与えた^[90]。一般市民の間では「ルエーガー万歳」の声が一段と高まり、ルエーガーは皇帝と人気を競うほどになった^[90]。

1897年、5度目の選出を受けたルエーガーに対して、フランツ・ヨーゼフはついに折れて、4月16日にウィーン市長就任に同意した^[91]。4月20日にはルエーガーと謁見し、市長就任の宣誓が執り行われた^[91]。しかしこの一連の流れからフランツ・ヨーゼフは、帝国内のユダヤ人から「反ユダヤ主義の盾になって下さるわれらの庇護者^[92]」としてますます敬愛されるようになった。

フランツ・フェルディナント大公との対立

1900年、イタリアの都市メラーノでフランツ・フェルディナント大公と馬車に同乗するフランツ・ヨーゼフ1世。

弟カール・ルートヴィヒ大公が1896年に死去すると、その長男で皇帝にとっては甥にあたるフランツ・フェルディナント大公を帝位継承者に指名した。ハンガリーの政治的独立を半ば認めて帝国内の民族融和を図るフランツ・ヨーゼフの政策に対し、フランツ・フェルディナントは、多くの特権を得ているにもかかわらずなお完全な独立を要求するハンガリー人を「厚顔」として批判する^[94]など、両者の間には政治的対立がたびたび見られた。フランツ・ヨーゼフが諸民族の融和を信条とし、「一致団結して」をスローガンに掲げているのに対し、フランツ・フェルディナントはオーストリアの強化を目指し、国粹主義的な思想を展開していた^[95]。

評価

東欧革命後は、旧共産圏のかつて帝国領だった都市でもフランツ・ヨーゼフ1世の肖像画を見ることができる。写真はポーランド南部の旧帝国領クラクフにて。

戦争には負け続け、皇太子にも皇后にも先立たれ、民族問題にも悩まされた不幸な皇帝だと一般的に評価される^{[23][117]}。数多くの過ちを繰り返したものの、その忍耐と不屈の精神、そして温厚にして誠実な人柄から、晩年には帝国内のすべての民族に慕われた^[92]。

神聖ローマ皇帝の由緒正しい血統、68年にもわたる最長在位記録。そして皇太子ルドルフの情死、美貌の皇妃エリーザベトの暗殺事件といった帝室の悲劇。これらの要素は、フランツ・ヨーゼフ1世をよりいっそう皇帝らしく見せ、オーストリア国民の理想の君主像に限りなく近づけた^[118]。幼年学校や将校クラブはもちろんのこと、安宿や娼家にまでも皇帝の肖像が飾られていた^[119]。オーストリア各地のみやげもの屋には皇帝の似顔絵入りの絵はがきやコーヒーカップが並び、皇帝のプロマイドが人気を呼んでいた^[119]。

第一次世界大戦の困窮の最中だったため、死去の時にはさほど国民に動揺を与えなかった^[120]。当時の帝国議会議員の日記には、「深い倦怠感と無気力さが帝国中に漂い、老帝の死に対する悲しみも、新皇帝に対する歓声もあまりみられないようだ」と書かれている^[120]。しかし戦間期の混乱や第二次世界大戦の悲劇の後、「古き良き帝国時代」の象徴としてフランツ・ヨーゼフ1世の絶大な人気が復活した。今なおウィーンの街ではフランツ・ヨーゼフ1世の銅像やポスターを至るところで見ることができる^[117]。これはホーエンツォレルン家の王都だったベルリンでは見られぬ光景である^[117]。東欧革命後の現在では、オーストリア以外の旧帝国領土でもフランツ・ヨーゼフ1世の肖像画をあしらったミネラルウォーターなどの商品が出回っている。

68年に及ぶ治世の中で、政治的には数々の難題に直面したが、オーストリアの文化・経済は大きな発展をみた（世紀末ウィーン）。フランツ・ヨーゼフ1世は公私を問わずさまざまな行事に姿を見せ、あらゆる芸術文化を庇護した^[121]。世紀末ウィーンの輝きすら沈みゆく帝国の最後の光芒であったが、この文化発展への貢献、とりわけ19世紀末にウィーンを文化的メトロポリスに変貌させたことこそが、フランツ・ヨーゼフ1世の最大の功績だといえる^{[92][122]}。

以上 Wikipediaより

資料1ー③

エリーザベト	1837～1898	(在位1854～1898)
フランツ・ヨーゼフ1世	1830～1916	(在位1848～1916)
アルフレッド・アドラー	1870～1937	(1916年従軍 1935年渡米)
リディア・ジッハヤー	1890～1962	(1938年ウィーンを離れる)

第一次世界大戦 1914～1918

第二次世界大戦 1939～1945

資料2 抄読会 2022/4/14 佐々木さんのレジュメより

The Insane, the Neurotic, and the Nervous

精神異常、神経症、神経質

All goals of personal superiority are unreachable, fictitious, goals of Godlikeness, of perfection, of absoluteness.

個人的な優越の目標はすべて、到達不可能であり、仮想的であり（架空の）、神々しく、完璧な、絶対的な目標です。

In many cases these goals of absoluteness are expressed in a specific form.

多くの場合、こうした絶対性の目標は特有な形で表現されます。

People who have broken with the logic of life, the insane, live as if they had reached their fictitious goals.

人生の論理と決別した人たち、精神異常は、あたかもその仮想（架空）の目標に到達したかのように生きています。

If they have the idea that to be secure would be to be Christ, they will believe in their insanity, i.e., they will live as Christ.

もし安心することは救世主になることだという考えがあると、彼らは自分の狂気を信じるでしょう、すなわち、救世主として生きるでしょう。

They will live as saints or whatever they consider to be the height of achievement.

聖人として、あるいはその他、彼らが達成の高み（絶頂・極み）と考えるものとして生きることになります。

It might be a band leader, or a king, or something in their opinion that has reached the absolute.

それはバンドのリーダーであったり、王であったり、彼らの意見では絶対的なものに到達している何らかのものであるかもしれません。

This is the real difference between the insane and the neurotic.

これが精神異常と神経症の最も重要な違いです。

The neurotics would like to be, for example, Christ, good, great, but they know very well they are not.

神経症は、例えば、救世主、善、偉大でありたいと思っていますが、（自分が）そうでないことはよく分かっています。

The insane persons have stepped over the border, and they think they *are* their prototypes.

精神異常は境界線を越えて、そして自分がその原型であると思込んでいます。

The neurotics have not broken with the logic of life; the insane have.

神経症は人生の論理と決別しているわけではありません、精神異常はそうになっています。

People could have superlative, unreachable goals and still not be neurotic because they might be quite willing to go toward this goal and see how far they progress.

人は極度に手の届かないような目標を持っていたとしても、それだけでは神経症にはなりません、なぜなら、この目標に向かって（喜んで）進むかもしれませんし、どこまで進んでいるかを理解しているからです。

On the other hand, the absence of an unreachable goal would not insure one against a neurosis.

一方で、到達不可能な目標がないことが、神経症が起らないようにするわけではありません。（到達不可能な目標がないからといって、神経症にならないとは限りません。）

All our ultimate goals are always unreachable because they are goals of absoluteness.

私たちの究極的な目標はすべて、いつも到達不可能です、なぜなら絶対性の目標だからです。